

Q&A



聖路加国際病院
精神腫瘍科医長

保坂隆 さん

1977年、慶応大医学部卒。
東海大精神科教授などを経て、
2010年、現職。

がん患者同士の支え合いにはどんな効果や意味があるのだろうか。患者や家族の心理支援やグループ療法についての研究がある、聖路加国際病院(東京・中央区)精神腫瘍科医長の保坂隆さん(59)に聞きました。

「がん患者のピアサポート(仲間による支援)が広がってきた背景を教えてください。」

「2007年」

相談者養成 支援の質向上を

「2007年」

年に施行されたがん対策基本法とそれに基づく基本計画で、がん患者や家族の心のケアの必要性がうたわれ、都道府県や拠点病院が相談体制を整えるための、公的な助成が得られやすくなったことが大きいです。基本計画に、患者自身が主体的にがん対策に取り組む

患者や家族が支援する意味はどこにあるのでしょうか。

「同じ経験をした者として、より深く話を傾け、共感ができ、相談した患者が、精神的な解放感を得られる効果があると思います。先輩患者として、生活面での不安や医師への質問の仕方などについて、より具体的で現実的なアドバイスができるというプラス面もあるでしょう。乳がん患者についての研究では、社会的な支援がある方が長生きするというデータもあり

「ピアサポートには、どのような形があるのでしょうか。」

「一対一のカウンセリングのほか、グループ療法や患者が集まるサロンなど様々な形があります。ただ、『カウンセリング』と特別な訓練を受けた専門家によるものという印象を与えるので、『ピアサポート(仲間の支援者)』による支援という言い方をする団体が多いようです。」

「精神科医や臨床心理士などの専門家ではなく、

さないかという心配もあります。医療が必要な場合は、専門家につながる体制を取ることが必要です。」

「今後、ピアサポートはどのように広がっていくと思いますか。」

「患者や家族がどこに行っても質の高い支援が受けられるよう、ピアサポートの養成プログラムは重要です。厚生労働省の委託事業として、日本対がん協会が、ピアサポートを養成するための標準プログラムを作ろうとしています。」

「また、私がかかわっているのですが、がんになった経験がある看護師を集めて、同じ患者の立場で相談にのる『ピアカウンセリングナーズ』の養成も始まっています。医学的な知識が基本にある人たちなので、質の高い相談が期待できると思います。」

(岩永直子)

(次は「病院の実力 がん薬物療法専門医」です)